

ぐるりと

島崎 町

お試し読み版

ログリン社

			1. 暗闇の世界	
			2. 六年三組	14
			3. 腕時計の光	28
			4. 光の威力	52
			5. 実験の結果	66
			6. ヒヨ子	80
			7. 暗闇の6年3組	96
			8. 集団下校	112
			9. 『故郷』の秘密	124
			10. 広田椎奈の家	142
			11. 新しい作戦	158
			12. 暗闇の部屋	172
			13. 本の秘密	184
			14. 3年前の世界	196
			15. 三年後の世界	212
			16. 意外な真相	226
			17. 追いかける2人	238
			18. グズグズの城	258
			19. 小林君	276
			20. 生け贄の儀式	284
			21. シン	302

1. 暗闇の世界

すごく静かな図書室で、ぼくは本棚に手をのばす。いちばん下にある、ぶ厚い辞典を手にとると、軽くふわりと持ちあがった。

あれ？ 変だぞ。箱だけで、中に辞典が入ってない。代わりに別のものが入っていて、箱を傾けると、それがぼくの手の中にストンと飛び出した。

なんだこれ？ 文庫くらいの大きさの、紙の束だ。右端を黒いヒモで綴じていて、本のように開ける。もしかして、手作りの本？ だれかに、だまされてるの？ ぼくはあたりを見まわした。

昼休みの、静かな図書室だ。まわりに人は、だれもない。本棚に挟まれた通路から、向こうに広場が見えた。

ぼくは恐る恐る、右手を闇の中にのばした。

自分の手を確認しようとするけど、それすら見えない。

手の中に、本の感触がある。ぼくはまだ、本を持つていらしい。

……。停電？ でもこんなに暗くなる？

いったい、なんなの？ 本を回した瞬間、突然真っ暗になって

キョロキョロまわりを見るけど、真っ暗でなにも見えない。

んにも見えない。

突然、目の前が真っ暗になる。どこを見ても暗闇だ。まったくな

本の中に飲み込まれるように、世界がぐるりと回転した。

「うわあ！」

広場の先には図書カウンターがあつて、律子先生が座っている。

いつもと変わらない様子に、少しホッとした。それにしてもこれはなんだろう？ ぼくは箱を下に置き、手作りらしきものを開いてみた。

中には、手書きの文章が書いてある。だけど変だぞ。

上と下で二段に分かれて、上の段は縦書き、下の段は横書きだ。しかも、下の段の文字はさかさまに書かれてる。

不思議な本だ。こんなの今まで見たことない。ぼくはさかさまの文字を読もうと思って、本を回転させた。

その瞬間、世界がぐるりと回った。



本を回して、下の段の、横書きの文章を読もう

コソソソ……。

あわてて手を引いた。目の前になにかある。

もう一度、ゆっくり、手をのばした。

コソソソ。さっきまでぼくは、図書室の通路にいた。きっと今、目

の前にあるのは……。

震える手をのばし、目の前にあるものをそとさわってみた。

平らな木の肌ざわりがした。本棚だ。さらに手をのばすと、棚の

中にスリとならんだ本にもふれた。

それがなにかわかると、だんだん霧が晴れるみたいに、暗闇の中

でも、ものが見えてきた。黒しかない世界に、うすい別の黒が現れ

て、黒と黒のあいだに境界ができる。それが線になって、ついに本

棚の形になった。

やっぱりここは図書室だ。あたりを見まわすと、さっきまでぼく

にも見えなかつたのに、本棚がいづつもならんでるのがわかった。

あれ？ 通路の先にある広場に、ほんのり明かりが見える。

本棚をさわりながら、通路をぬける。左右に壁のようにならんで

いた本棚がなくなると、目の前がいっきに開けた。

左にある大きな窓から、うすくぼんやりとした光が差しこんでる。

不気味に静まりかえった広場には、机がいづつもあって、まわり

にイヌがならんでる。

奥にある図書カウンターを見ると、だれもいない。いつもなら、

図書室担当の浅間律子先生が座っているはずなのに……。

「先生……」

そっと呼んでみた。でも、暗い図書カウンターから返事はない。

そのとき、

「クスクス……」

どこからか聞こえた。笑い声のような、ささやき声のような。

窓の外だ。暗くてよく見えないけど、そっちらから声がした。

「クスクス……」

また聞こえた。

もしかして律子先生？ ほくのことをからかっているの？

ゆっくりに窓に近づいて、ガラス越しに外を見た。暗くてよく見え

ない。だからカギを開けて窓を――

「開けちゃダメ！」

うしろから女の子の音がした。でもほくはもう、窓を開けてし

まっていた。

ヒヤリとした空気が外から入ってきて、顔をなでた。同時に、

「クスクス……」

笑い声がさつきよりも近くで聞こえた。

見ると、窓のすぐそばで、なにかがうごめいている。

なんだあれ……。

夜よりも暗い闇の中、人よりも大きな獣がこちにくる。長い腕

を地面までのばし、ノソノソと近づいてくる。動くたびにツルツル

の白い肌が、わずかな明かりに照らされる。

あんな生きもの、見たことない。

ガイコツみたいに大きな目。口は左右に広がって、まるで笑って

るようだ。その口から、

「クスクス……」

と声が聞こえた。風に乗って、獣の息が流れてきた。

うっ！ たまらず横を向いた。生きものが死んだような、ひどい

臭いだ。

「逃げて！」

声が出た。ふり返ると女の子がいる。おかつば頭で、白い上着に

ジーンズの短パンだ。

「うるし！」

女の子が窓をさす。見ると、窓からニューツと長い腕が入りこん

でる。腕の先には指が3本しかないけど、鋭い爪がまるでナイフの

ようだ。

「バカ！ 早く逃げるの！」

おかつばの女の子が走ってきて、パーカーのすそをグイと引っ

ぱった。いったいなんのこと？ さっぱりわからない。

「なに？ なんで逃げるの？」

「クスクスに殺されるよ！」

女の子の表情は、暗い中でも真剣に見えた。

「クスクス……」

まるで、渦に飲まれたみたいにくるっと回転したと思ったら、次の瞬間、目の前が急に明るくなった。まぶしい！ 突き刺すような光で目が開けられない。持ってた本で光をさえぎりながら、無理矢理まぶたをこじ開けた。

獣の姿はどこにもない。本棚がズラリとならんで、高く、静かにそびえてる。耳をすましても、あの「クスクス」って笑い声も聞こえない。

ビクビクしながら、あたりをうかがう。目がだんだん慣れてくる。ここは、図書室のうす暗い通路だ。

獣の姿はどこにもない。女の子も消えてしまった。腐ったような獣の臭いだけは、今も鼻の奥に残ってるけど……。ぼく、助かったの？

ぼくたちの背後で声かした。ふり返ると、獣が大きな体を窓から押しこんで、中に入ろうとしている。

獣は体をぎゅうぎゅう窓にこじ入れて、フシッ！ ます腕を。フ

シッ！ 次に足をおろした。

巨大な体がぼくの目の前にあつた。手を前について、よっんばいの姿勢なのに、ぼくの背よりかはるかに高い。

「クスクス！」

ぼくを見おろしながら、獣が吠えた。ひどい臭いに吐きそうになつて、ようやく我に返つた。

「<、くるな！」

あとずさりながら、持ってた本を投げつけようとしたら、

「タ×！」女の子がぼくの手をつかむ。

「なんで！」

「だつて本は大切なんだよ！」

「なに言ってるんの！」

意味がわからない。本なんて……。そうだ！

ぼくは手に持ってる本を開いた。この本を回したら、ぐるぐる

回ってこんなことになつたんだ。またこの本を回したら……。

そのとき、獣がのびでもするやうに、大きく腕をふりあげた。

鋭く凶暴な爪が、闇にキラリと光って……。

「クスクス！」

ぼくは本を回転させた。その瞬間、世界がぐるりと回つた。

「待って！」

女の子の声か、最後に聞こえた。

本を回して、上の段の、縦書きの文章を読もう

力がスルスルぬけて、その場に座りこみそうになったとき、ピピピ……と音がした。

ぼくの左腕で、黒いデジタル式の腕時計が鳴っている。昼休みが終わる五分前に予鈴が鳴るから、ぼくはいつも、その十秒前にアラームが鳴るようにセットしてるんだ。

時計の右側にあるボタンを押すと、デジタル式の文字盤がピカッと光って、音が止まった。そうだ、さつき図書室が暗くなったとき、腕時計を押して光を出せば役に立ったんじゃないか？

予鈴が鳴りはじめた。すばやく腕時計をはずし、パークのポケットにしまった。図書室では腕にはめてるけど、いつもは、先生に見つからないようにポケットに隠してるんだ。

もう昼休みが終わる。教室にもどらないと。この本を辞典の箱にもどして、本棚に返さないで。

手に持ってる本をじっと見つめた。この本はいつたい

なんなんだろう？ 心臓がまだ、ドキドキを残してる。
本を回したら、世界がぐるりと回ったんだ。そしたら
図書室が暗くなって……。もう一度回したら、ここにも
どつてた。

本を開いてみた。手書きの文章で、上の段は縦書き、
下の段は横書きで、さかさまだ。

この本には、不思議な力があるような気がする。暗闇
の図書室、見たこともない獣、それに、知らない女の子
本を回したら突然現れたんだ。

もしかしたら恐ろしい本かもしれない。ふれてはいけ
ない、呪われた本なのかも……。でも、あの不思議な体
験はなんだったんだろう？

心の中で、好奇心が別の生きものみたいに飛びはねる。
ふだん本なんて読まないのに、なぜかぼくは、この本に
惹かれてる。

体が自然に動いた。ぼくは本を、お尻のポケットに入

れた。まるでそのために作られたみたいに、本はピタリ
とポケットに収まった。

こんなことしちゃダメなのに……。ぼくは辞典の箱だ
け本棚に返して、通路を歩きだした。

うす暗い通路をぐんぐんぬける。広場に出て、暖かい
秋の日差しをあびながら、イスやテーブルのあいだを縫
うように歩いた。

向こうのカウンターに、律子先生が見えた。ぼくは
パーカーのすそをギョツと引っばって、お尻のポケット
を隠した。どうか見つかりませんように……。

一歩二歩と、カウンターに近づいていく。そこをすぎ
ればすぐドアだ。

律子先生はカウンターの中でなにか読んでいる。下を
向いてるから大丈夫だ、きつとバレない。

ドキドキする。心臓が破裂しそうだ。カウンターの前
を通りすぎながら、お尻のポケットを押さえた。ダメだ、

そんなことをしたらかえって怪しまれるのに。

二、三メートルしかないカウンターが、すごく長く感じる。早く、早くぬける！ そう思いながら、ようやくカウンターの前を通りすぎ、ぼくは廊下に飛び出した。

2. 六年三組

やったあ！ 廊下に出て、心の中で叫んだ。律子先生に見つからずに、図書室から出られた。

でも……そうだ、さつき図書室が暗くなったことを、先生に聞くべきだったのかな？ 先生もぼくと同じ体験をしたのか、たしかめた方がよかったのかもしれない。

そのとき、きゅーきゅーとにぎやかな声が聞こえた。

図書室は廊下のいちばん奥にあるから、向こう端まで見わたせる。向こう端の玄関から、昼休みを終えた生徒

がぞくぞく帰ってきてる。

ぼくも、もどらないといけない。ずぶずぶと気が重くなる。

ぼくは毎日、休み時間になると図書室にきていた。授業と授業のあいだや、給食を食べたあとの昼休みにも、どうしても教室にいられないんだ。理由があつて……。

予鈴はもう、とつくに鳴り終わっていた。階段は、玄関の前に一つと、図書室の前に一つある。図書室の前の階段をのぼれば、すぐ目の前は六年三組だ。

ぼくは、重い足をなんとか持ちあげて、一段一段、ゆっくりり階段をのぼった。二階になんか、つかなければいいのに。

階段をのぼり終え、二階の廊下に出ると、さつそく、目の前の教室から声が聞こえる。

からかう声だ。それに泣き声。小林君が、いつものようにいじめられてる。

ぼくはそれを見たくない。だけど止められない。だから休み時間になると、図書室に逃げている。

ぼくは一度、大きくふうーっと息をはいて、ドアを開けた。

教室の真ん中に固まっていた生徒たちが、いつせいに、花火みたいにパツと散った。だけど一人だけ、床に倒れてる。小さな背中を丸めて、肩をふるわせ泣いている。

小林君だ。いつも着てる黒と黄色のしましまトレーナーが、鳴き声にあわせて上下にゆれている。その姿が、ほかの動物からいつも狙われている弱い動物みたいに見える。ぼくはすごく嫌な気持ちになった。

「なんだ、シンか」

教室のすみから、聞こえた。佐田真一郎というぼくの名前を、みんな短くして「シン」って呼んでる。

「そうだよ……」

小さくつぶやいて教室に入ると、みんな、ホッとして

るのがわかった。ドアを開けたのが先生じゃなかったからだ。いじめに加わってない生徒まで、安心した顔をしてる。

みんな、いじめの現場を先生に見られないようにしていた。いじめに参加してない生徒まで、それに協力している。

六年生になって何ヶ月かしたとき、朝、教室に入ると小林君がからかわれていた。たしかに小林君はちょっと変わった子で、いつも変なタイミングで笑うし、声も大きい。だれかが話しても、全然別の話をはじめ。

ぼくも少し、やっかいだなあと思っていた。みんなも、ぼくと同じように思ってたんだ。だから、だれかが小林君をからかい出すと、どんどんそれが広まって、あつというまにエスカレートして、いじめになった。

それが何ヶ月間もつづいてる。ぼくはいじめに参加しないし、バレないように協力することもない。でも、ぼ

くはじめを止められない。みんなに注意できないし、先生に言うこともできない。なにもできずに教室から逃げて、図書室で時間がすぎるのをじっと待ってるだけなんだ。

教室のドアが、勢いよく開いた。

担任の田中建吾先生だ。先生が入ってくると、ぼくもみんなも、あわてて席についていた。

田中先生は、スラッとした体をピンとのばして、いつものようにハキハキと授業をはじめた。若いし背も高いし明るいし、田中先生は人気がある。

でも先生、先生ははじめに気づかないの？ だって、耳をすませば、小林君が鼻をすする音がする。注意深く見れば、くしゃくしゃに丸められたノートの切れ端が、小林君にぶつけられてる。

田中先生が見てる六年三組と、ぼくが見てる三組は違うんだ。小林君が落とした消しゴムを、教室のすみに蹴

り飛ばした桐山エリ子が、次の瞬間に、手をあげて正解を発表してる。

田中先生はエリ子を褒めて、エリ子はうれしそうに笑う。でも小林君は、どこかに行ってしまった消しゴムを探して、授業中ずっとキョロキョロしてる。

先生に見えてる六年三組はいい子ばかりで、いじめなんかどこにもなくて、やさしさにあふれた楽しいクラスだ。だけどぼくにとっては、いつも泣いてる子がいる、いじめのクラスなんだ。

放課後、ぼくは図書室の前でしばらくウロウロした。返そうかどうか迷ったけど、結局、本をカバンに入れたまま学校の外に出た。

「見つかったら大変だぞ」

心の中でささやく。大金のつまったカバンを持つてるみたいに、ビクビクしながら歩く。

無断で本を持ち出すなんて、こんな悪いことをしたのは初めてだ。下校中の生徒たちが、チラチラこっちを見てるような気がする。みんな、ぼくの犯罪を知ってるみたいだ。

そんなわけない、大丈夫、と自分に言い聞かせる。みんな楽しく笑いあってるだけなんだ。

校門を出て、ゆるやかなくんだり坂を歩いた。肩からさげたカバンが、パタンパタンと腰にあたる。

この中に、本が入ってる。罪悪感で、胸がぐつと苦しくなる。でも同時に、この本について知りたいっていう好奇心もブクブクわいてくる。

顔をあげると、一直線にのびた坂道の向こうで、秋の夕暮れがはじまっていた。水に落としたインクみたいに、青い空に赤い色が広がりはじめる。

そんなとき、音楽が聞こえてきた。どこから聞こえてくるのかわからないけど、毎日、四時三十分、『故郷』

という曲が街全体に流れる。ぼくは、カバンが腰にあたる音を『故郷』にあわせながら歩いた。

パタン、パタン……。カバンが腰にあたるたびに、歩く速度が少し速くなる気がする。パタン、パタン……。まわりを歩いている生徒は、一人二人と曲がって、どんどん少なくなっていく。

くんだり坂が終わると、少し大きな道が左右に走って、ここを右に曲がると商店街、左に曲がると国道に出る。まっすぐな道が十字の形に交差するから、十字路というらしい。

十字路のまわりは家の塀で囲まれていて、ここだけ少し暗くなってる。ニョロリとのびた街灯が、まだ明かりをつけずに眠っているけど、もう少ししたら起きだして、十字路を明るく照らすはずだ。

ここまでくると、家まではあと半分だ。駆け足で十字路を越えると、左右の家がなくなっって、目の前がいき

に開けた。

右側は砂利の敷地で、中古車が何台もならんで売られている。正面には中央公園が広がっていて、競技場みたいに大きい。

公園は、高い木に囲まれていて、赤や黄色に色づいた葉っぱに夕陽がふりそそいでる。

まっすぐ公園に向かった。まわりを囲んでる高い木が途切れ、東側の入り口になっている。そこから入って、公園の真ん中を通り、反対側の西の入り口から出るのが近道なんだ。

「返して！」

突然、声が聞こえた。ぼくは驚いて立ち止まった。

あの声は、もしかして、小林君？

「クスクス……クスクス……」

女子たちの笑い声も聞こえる。

公園に小林君の姿が見えた。入り口から少し入ったと

ころだ。小林君の前には女子が三人いて、それに、もう一人大きな男もいる。

女子はみんな六年三組だ。桐山エリ子と、エリ子の言うことをなんでも聞く手下の女子が二人。

エリ子のとなりにいる大きな男が、小林君に近づいた。エリ子の兄の桐山コウジだ。中学三年生の不良で、黒くて大きなサングラスをかけている。

「焼却場で燃やすぞ！」

桐山コウジが小林君のランドセルを高く持ちあげた。

ぼくはビクツとした。あれは小学校でよく使われる冗談だ。焼却場は高い煙突で有名で、ぼくのお父さんはそこで働いている。だからその冗談を聞くたびに体が反応してしまう。

サングラスに、夕陽が反射して不気味に光った。桐山コウジはランドセルを投げた。ランドセルは飛べない鳥のように宙を舞い、地面に衝突したとたん、教科書や

ノートが飛び散った。

小林君の泣き声が響く。エリ子や手下が笑う。

「クスクス……クスクス……」

エリ子の赤い髪が、魔女のようにゆれる。

抑えきれない嫌な気持ちがあがってくる。体の中から腐っていくような、嫌な気持ちがあが、ブクブク、ブクブク……。

桐山コウジが、勝ち誇ったように鼻をこすると、グズグズと音がした。一年中鼻が悪くて、こするたびに音をたてるから、陰で「グズグズ」と呼ばれてるんだ。

ぼくは道を右に曲がった。パーカーのポケットに手を入れて、下を向いて歩く。見ないようにしよう、考えないようにしよう。

近道をあきらめ、中を通らずに、公園の外側をなぞるように歩く。

そうして遠回りに、反対側の、西の入り口まで来た。

公園の向こう側に東の入り口が小さく見えるけど、小林君たちの姿はもうない。

なんだかホッとした気持ちになって、ぼくは右に曲がった。道がせまくなり、左右にらんだアパートの影で、急に暗くなる。

公園の東側は、学校があったり、新しく大きな家が多いけど、西側は、小さい家や安いアパートが建っている。古い。

ぼくはお母さんと二人で、西側のアパートに住んでいる。お父さんはいない。いなくなった。

一年前、お父さんとお母さんは大ゲンカをして、まずお父さんが家を出ていった。そのあと「お金をはらえない」とお母さんは言って、ぼくと二人でアパートに引っ越した。

あつというまにお父さんも家も消えてしまって、ぼくに残されたのはお母さんだけだった。

トボトボとせまい道を歩くと見えてくる。右側の三つ目のアパート。あそこにはぼくは住んでいる。

さびた階段を二階にあがった。アパートの外側にある通路を歩いて、二番目の部屋のカギを開ける。

ドアを開けると、こもった空気が、まるで留守番をしていたみたいに出てきた。

部屋の中に入ると、すぐ左にある台所の窓から、夕陽がたっぷり入って、部屋中が赤く照らされてる。テレビ、テーブル、ぼくの机やイス……。みんな、お帰りなさいも言わずに静かだ。

靴を脱ぎ捨て、カバンを放り出した。心も体も、いっきに軽くなる。

「帰ってきたあ……」

部屋の真ん中にごろんと寝転がった。今日はいろんなことがあって疲れた。

お母さんが帰ってくるまでに晩ご飯の準備をしないと

いけないけど、時間はまだある。これからがようやくほくだけの時間なんだ。

ごろんと寝返りをうつと、テーブルの向こうにカバンが見えた。さつき放り投げたせいで、カバンの中身が、押しつぶされたクリームパンみたいに飛び出してる。教科書、ノート、それから、あの本。

昼休みに図書室で見つけた本だ。白いノートを、黒いヒモで綴じてある。あの本を回したら、突然、暗い図書室になった。そこに、獣と女の子がいた。

いつまでも忘れない夢みたいに、強烈に記憶に残ってる。あれはなんだったの？

心臓まであのことの思い出したみたいに、ドキドキと早く動きはじめた。

ぼくは立ちあがってテーブルの向こうにまわり、恐る、手をのばす。大丈夫なの？

拾いあげても、なにも起こらない。ふつうの手作りの

本だ。開くとカサリと音をたてた。

最初の一ページ目、手書きの文字が書いてある。上の部分は縦書きで、下の部分は、さかさまで横書きだ。

文章の中味より、どうしてこの本をひっくり返しただけで暗くなったのか、そっちの方が気になった。それにあの獣。白くてツルツルで臭い息を吐くあいつ。あんなの見たことない。

そうだ、あの子はどうなったんだろう？ 図書室に獣が入ってきて、そのあとは？ ぼくが最後に本をひっくり返したとき、女の子の声が聞こえたんだ「待って！」って。

急に心配になってきた。あのときは自分のことで精一杯だったけど、今思い返すと、あの子はどうなったんだろう？

ぼくが昼休みにこの本をひっくり返したら、図書室は暗くなった。もう一度ひっくり返したら、明るい図書室

3. 腕時計の光

本を回したとたん、ぐるりと回転した。本の中に飲みこまれたような感じがして、世界は一瞬で変わっていた。光が消えて、暗い世界になっっている。
昼休みと同じだ、やっぱり、本を回したらこうなるんだ！
あれ？ ぼくの右側から、うっすら明かりが入ってきてる。あれは台所の窓だ。ここは図書室じゃなく、さっきまでほぐがいた、アパートの部屋なんだ。
< 変だ。だってテーブルがない。窓からのわずかな光を頼りに見まわすと、テーブルだけじゃなく、部屋中がガラスとして、もの

にもどった。

じゃあ今ここでひっくり返したら……。

結果はわからない。でもどうなるのか、答えが知りたかった。

本をひっくり返した。

世界がぐるりと回った。



本を回して、下の段の、横書きの文章を読もう

かなにもないみたいだ。
もっといろいろ確認したいけれど、よく見えない。夜中にサンクラアをかけてるみたい、ぼろっと暗い。
そうだ！ ぼくには腕時計があるんだ。ボタンを押せば光るんだ。本をスポンのうしろポケットにしまい、パーカーのポケットに手をつこんだ。
あれ？ ない。いつもここに入れてるのに、ない。もしかして落としたの？
あわててパーカーのポケットの奥まで手を入れた。ゴソゴソ探すけれど、ない。
どうしよう！ と思ったとき、ポケットを探ってる左腕に、腕時計がはまってることに気がついた。
昼休みが終わるとき、たしかにポケットにしまったのに、なぜか

今は腕についている。

頭が混乱したまま腕時計のボタンを押した。トバッ！ 光が飛び

出した。

「わっ！」

腕時計の文字盤から光が一直線にのびて、天井まで届いている。ま

るで光の柱だ。

すでい……。いつもは小さな光なのに、暗闇の中ではこんなに強

かなライトになるんだ。

しみじみ見とれていると、ふいに光が消えた。部屋は暗闇に包ま

れる。さっきまでの明るさが、ウソのようだ。

そうだ、腕時計の光は10秒たつと消えるんだ。

ほくはもう一度、腕時計のボタンを押した。

トバッ！ のぼった朝日みたいに光があふれ出す。左腕を動かす

と、光はレーザービームみたいに部屋の中を駆け回る。

「おー！」

部屋のすみずみまで照らしてわかったことは、やっぱりこれは、

さっきまでほくがいたアパートだけど、なぜか部屋の中にはものが

ないというところだった。テーブルやテレビ、ほくの机やイスもない。

昼休みに本を回したときは、図書室にはちゃんとした本や机があった。

なのにどうしてこの部屋は違うんだろう？

まったくわからない。それに、部屋の中が違ってるなら、外はど

うなってるんだろう？

腕時計の光をドアに向けた。暗闇の中にガランとした玄関が浮か

びあがる。なにもない。靴入れもないし、ほくの靴もない。

靴がなくなったら、どうやって外に出よう？ そう思って玄関へ歩

きはじめると――

「あれ？」ようやく気がついた。ほくは部屋の中で靴を履いている。光を足に向けて、履いているのは学校の白い上靴だ。

なにかなんだかわからない。ドアの前まで行くと、腕時計の光が消えて、部屋はまた暗くなった。

ほくは暗い玄関で立ちつくす。まったくわからないとだけだ。本を回すといろんなことが起こる。暗くなって、部屋のものがなくなつて、腕時計の場所も、履いてるものも変わってしまった。部屋の中だけでこんなふうに、ドアの向こうには、いったいなにが待ちうけているんだろう。

ほくはドアを開けた。

外も暗かった。でも、光が空から落ちてくる。見あげるると月が輝いていて、きれいなブームラソみたいな三日月だ。

部屋の外に出て、アパートの通路に立つと、暑くもなく寒くもな

<不思議な気温だ。ちよーどいいのとは違う。そもそも気温がないみたいだ。

通路の端に、胸の高さくらいの手すりがついている。ほくは手すりに手をかけ、住宅街を見わたした。

暗い。どの家にも明かりがなくて、真っ暗だ。街灯まで消えていて、まるで街全体が停電になったみたいだ。

ボタンを押して、腕時計を見た。光が強すぎて見つらいけど、デジタルの数字は「16:56」だ。

夕方なのにこんなに暗いなんて……。

知ってる街のはずなのに、ほくにはここが別の場所のように思われた。似ているだけの違う街に、迷いこんでしまったみたいだ。

突然暗くなつただけなのか、それともここが違う世界なのか。なにか同じでなにか違うんだろう。

アパートの階段をおりた。とりあえず公園に行ってみよう。光で照らしながら、せまい道を歩きます。ギョウギョウという上靴の音だけが闇に響く。上靴のまま外を歩くと、なんだか悪いところとしてる気になるから不思議だ。

道をぬけると中央公園の前に出た。まわりを囲む木が、月の明かりに照らされている。でも暗いから、葉っぱの色が黒と濃い青にしが見えない。

木の1本1本は、固まった巨人みたいで不気味だ。いつもより低いような気がするけど、そんなところあるだろうか？

西の入り口から公園に入った。アスファルトの通路がまっすぐのびて、ずっと先にある東の入り口につながっている、はずだ。暗く、東の入り口はまったく見えない。

腕時計の光で照らしながら歩いた。だれもいないようにけど、とき

ときなにか聞かえてきたような気がする。ドキッとしてそのたびに光を向けるけど、だれもいないベンチだったり、遊具だったりした。

ようやく東の入り口についた。公園の外に出ると、いつもの習慣で、学校につづく道を歩きはじめる。

あれ？公園の斜め前にある敷地は、販売用の中古車ならんでるはずなのに、1台もない。

やっぱり、ところどころ違う。ここは、ほくのいる世界とは違う場所なんじゃないか？

そのとき、音がした。心臓がピクンとはねあがる。

音はすぐその十字路から聞こえてくる。だんだんだんだん、こちに近づいてくる。

タツタツタ……。もしかして、足音？

ほくは音のする方へ歩きだした。腕時計の光が消えて、あたりは

暗くなっただけで、消えたままにする。十字路のまわりは高い塀で、左右の見通しが悪い。足音は十字路の左側の道から聞こえてくるけど、ここからじゃ姿が見えない。

「だれかゝるんだ。」

ほくは十字路の曲がり角へ歩いていく。

もうすぐ足音の正体がわかる。あと3歩……2歩……1歩……。「ぎゃっ！」と目の前で声が出た。「びっくりすんだろ！ なんだおまえ！」

暗闇の中から、背の低い男子が現れた。短い髪に上下のジヤージ、フロントセルを背負って、見たことのない顔だ。

「なんだおまえって……ほ、ほくは佐田真一郎っていうんだけど、きみはだれ？」

「なんで答えねーとイヤなんだよ！」

自分から聞いてきたくせに、なんて乱暴なヤツだ。でもよく見るど、手に持った野球のボールをギュッと強くにぎりしめてる。もしかして緊張してる？

「ねえ左千夫！ どーしたの？」

そのとき、男子のうしろから声が聞こえた。商店街につづく道から、走ってくる足音が聞こえる。

ほくは目をこらして、道の向こうの暗闇を見つめた。

だんだんだんだん、白い服が見えてくる。白い上着にジーンズの短パンだ。大きなリュックサックを背負った、おかつば頭の女の子がこっちにやってくる。

あの子だ！ 図書室にいた子だ！ 女の子は男子のうしろまで走ってきて、ようやくほくに気がついた。

「あ、キミ！ もどってきたんだね！」黒髪をゆらしながらほくの

前に立ち止まった。

「わたし、急にいなくなるから、びっくりしちゃった！」

「あ、うん……」

とまどっていたら、さっきの男子が割りこんできた。

「じゃあ、こいつが図書室から逃げたヤツか、いくじなしめ！」

「そんな……」

「なによ！ 左千夫だつてクスクスが現れたら逃げるでしょ！」

「それはまあ……」

女の子に言われて、男子はシュンとおとなしくなった。

「あ、ありがとう。えーと……」とまった。名前がわからない。

「わたし、三知純。純と呼んで！」

「ほ、ほくは佐田真一郎。みんなシッソつて呼ぶんだ」

「シッソね！」

「うん！」

「オ、オレは佐藤左千夫だからな。左千夫と呼んでいいぞ」

仲間はずれになりかけて、横から割りこんできた。

「う、うん、左千夫だね」

いきなり友達が2人もできた。暗間だらけの不思議な場所だけど、

いいところもあるみたいだ。

「あ、そうだ」ほくは思い出した。純に初めて会ったのは、暗い

図書室だ。あのとき、獣に襲われて……。 「純、大丈夫だったの？」

「獣が……」

「獣？」

「白くてツルツルした怖いヤツ」

「クスクスのこと？」

「そう、クスクスつて鳴いてた。あれ、クスクスつて名前なの？」

「うん。わたし、あのあとすぐ逃げて、図書室のドアを閉めて、ク

スクスを閉じてめたの」

「じゃあ助かったんだね！」

「でもよー」左千夫が割りこんできた。「そのかわり大変だったん

だぜ～。クスクスが暴れて図書室はめちゃくちゃになってよ。ま、

オレと純で直したんだだけだな」

「本をもどしたのわたし！ 左千夫は見ただけでしょ！」

「ちえっ！ 図書室なんで行くからあぶない目にあうんだぜ」

「いいでしょ！ 本、好きなんだもん！ ほら見て！」

そう言ったて純はリュックサックから本を出し、まるで宝物を見せ

るみたいほかにほくの方へ差し出した。

「シッも図書室に行くことあるでしょ？」

「えっ？」ほくははじめを見るのが嫌だから、毎日図書室に逃げて

いる。今、ほくのお尻のポケットに入ってる本は、図書室から無断

で持ち出したものだ。

「う、うん、たまに図書室に行くよ……」

「ほらやっばり！ 左千夫と違ってシッは本好きなんだよー。ねえ

シッ、どの本読みたい？」純は本をグイグイほくに押しつけてくる。

「え、えっと……」

「オ、オレだって純と一緒に図書室行くぜ！」また左千夫が割りこ

んできた。「それに純のうちは本屋だから、いっつもオレ、買いに

行くしよー！ おまえ、純の本屋で買ったことあんのか？」

「え？ ないよ」

「じゃあオレの勝ちだな！」

「やめなよ左千夫！ シッ、ごめんね」

「うん……」

弱気なほくを見て、左千夫は勝ちほこったように言った。

「おい純、もうすぐ夜になるぞ。オレが守ってやっから帰ろーぜ」
「左千夫がわたしを守るの？ 無理だよ〜」

「なんだよー！」

「だっさっき、うわーって叫んでたでしょ。左千夫の声が聞こえ

たから、わたし、ここにもどってきたんだよ」

「ちえっ、だっだよー、こっちでなにか光ってたんだぜ」

「え？ どこで？」

「ねえ、光ってこれのこと？」

ほくは腕時計のボタンを押した。

光が飛び出し、闇を突きぬける。一直線にのびた光が純の体にあ

たり、煌々と輝いた。

「わあ！」

「うへえ！」

純と左千夫が同時に叫ぶ。純が、震える手を光の中に入れてと、
太陽みたいに輝いた。

「ねえこれ、光ってる！」

「すげえ！」

驚いてくれて、ほくはうれしくなった。

「これ、お父さんにもらったんだ。太陽の光で充電するんだよ！」

とたんに純と左千夫の表情が消えた。10秒たって光も消えて、

一瞬で真っ暗だ。ほく、なにかまずいと言った？

「おまえ、太陽の光で、充電できるのか？」左千夫が言った。

「うん」

「い、いったよ」

「いつって、昼間だよ。太陽が出てるときに充電してるんだ」

純が、これでもかかってくらい笑顔になった。
 「ほらやっぱり言ったとおりでしょ！ シンは救世主なんだよ！」
 「そんなわけあるかよ！」
 「絶対救世主だよ！」
 「ね、ねえ」ほくにはさっぱりわからない。「救世主ってなに？」
 「救世主はね、外からきて世界を救ってくれる人のこと。シンは
 きっと、別の世界からきたんでしょ？」
 「うん……、たぶんそうなのかもしれない」
 「やっぱり！ シンの世界には太陽があるの？」
 「もちろんあるよ」
 「すごいすごい！」純が喜ぶたびに、髪がびよんびよんはねあがる。
 「すご〜くねーよ。オシたちの世界にも前はあったろ」
 「ねえ、この世界には、きみたちしかいないの？」

「ケッ！ そんなわけねーだろ」
 「だって、だれもないよ」
 「いるだろ、ほら」
 あたりを見まわした。暗闇だ。なにもないし、だれもない。
 「見えないよ」と言いかけたとき、闇がゆれた。なにか動いている。
 黒と黒の微妙な違いをなんとか見分けるように目をこらすと、闇
 の中にできた影みたいなのに、何人かが十字路を歩いている姿がだんだん
 見えてきた。
 歩いているのは3人。男の子と、お父さんとお母さんだ。足早にほ
 <たちの横を通りすぎ、商店街にっつ<道を歩いていく。
 なにもないと思っ<て見たら見えないし、なにかあると思えば暗
 い中<でも見えるんだ。
 「もうすぐ夜がく<るから、みんないそいで帰ってらんだよ」

純が言ううちに、3人は暗闇の中に見えなくなった。

「でも純、夜がくるって言ったって、もうじゅうぶん暗いよ」

「まだ明るいでしょ？ 月も少しだけ残ってるし」

見あげると、彫刻刀で彫ったみたいいに細い月が、なんとも頼りな

く光ってる。

でもたしか、アパートの通路で見たときは三日月だったはずだ。

「ねえ、月が細くなってらんだけど」

「時間がたつと変わるの。朝は細いけど、昼間になると満月になる

の。で、夕方になるとまた細くなって、夜は、消える」

「でも、夕方でこの暗さなら、夜になったら……」

「本当に真っ暗」

「夜になったらよー」左千夫がぬっと顔を近づけてきた。「真っ暗

でクスクスから逃げられないんだぜ……。もう何人も食べられてる

んだ」

図書室のクスクスを思い出し、ぼくはゾクゾク寒気がした。

「だから、月が消えて夜になる前に、家に帰らないといけないの」

「ねえ、この世界に光はないの？ 電気とかライトがあれば、クスクス

から逃げられるんじゃない？」

「光るのは月だけ。あとはダメ……」

純の顔が暗闇の中でさらに暗くなった。

「ねえ、街灯は光らないの？」

十字路には街灯があるはずだ。ぼくは電柱を見まわした。

どれも真っ暗で、明かりは1つも灯ってない。

「街灯も同じ。光は全部、闇に吸収されちゃうの。テレビは真っ暗

なまま声しか聞こえないし、火も熱いだけで、光らないの……」

「ちえっ！ この世界に光るものはないんだ。だからオシも野球で

きなくてよい。オシの剛速球を見せてやりてーなー」

左千夫がくやしそうに野球ボールを空中に投げた。

ここは暗闇の世界なんだ。ほくの世界とは全然違う。光は1つも

存在しなくて……。あれ？

「でも、ほくの腕時計は光るよ」

「そう、だからすていの！」純の表情が急に明るくなった。「だか

らシンは救世主なんだよ！」

「そんな……。救世主だなんて信じられないよ」

「みんな知ってるんだよ。いつかきくと、世界を救ってくれる人が

現れるって。シンは光を持つてる。だからわたしたちを救ってくれ

るんでしょ？」

純のうれしそうな顔がどんどんぼくに近づいてくる。

「そ、そんなこと言われても……」

の声だ。どこ？ キョロキョロまわりを見まわす。

そのとき、「クスクス……」と声が聞こえた。図書室で聞いた獣

「ぎゃああああ！」

叫び声かした。純のうしろからだ。それからタタタ……と足音が

して、暗闇の中からお母さんと男の子だけが逃げてくる。さっきこ

こを通りすぎた家族だ。

「クスクス……クスクス……」

2人を追うように、うしろの暗闇から声が聞こえてきた。

「シンこっち！」純と左千夫が逃げだした。

「ま、待って！」あわてて2人を追う。純と左千夫は公園の方へ

走っていく。

「どうすんだよ！ 家に帰れないよ！」前を走る左千夫の声が、今

にも泣きそうだった。ふり返ると、さっきのお母さんと男の子は十字路

を曲がらず、道をまっすく逃げていく。

そのとき、白い怪物が姿を現した。

クスクスだ。両手を地面にたたきつけ、4本足の動物みたいに

走ってくる。十字路を曲がって、ぼくたちの方へやってくる。

「ここにくる！」

ぼくの言葉に純がふり返った。背負ったリュックサックが大きく

ゆれる。純はバンスを崩して道路に転んでしまい、リュックサッ

クから何冊も本が飛び出した。

「行って！」追いついて純の腕を引っぱった。

「でも本が！ 大事なの！」純は本を拾い集める。

「うるし！」左千夫の声がした。顔をあげると、うるしからクスク

スが追ってくる。

純はまだ本をリュックサックに入れてる。もどかしい。

パッと明るくなった。思わず目をつぶる。心臓が、体
の中で跳びはねてる。ドクンドクン……ドクンドクン
……。

ゆっくり目を開けると、夕陽がテーブルやカバン、部
屋中のものを赤く染めていた。アパートの部屋だ……。
ぼく、もどつてきたんだ……。

だけど安心したのは一瞬で、すぐに罪悪感がブクブ
クわいてきた。

どうしよう、ぼくはまた逃げたんだ。純を置いて、左
千夫も置いて……。

純や左千夫を助けに行きたい。だけど……だけどぼく
がああ怪物を倒せるの？

「クスクスの弱点は光なの！」

「早く！」ぼくもリュックサックに押しこむ。

「シン、光で倒して。腕時計で！」純が言った。「クスクスの弱点

は光なの！」

「でも……」

クスクスが腕をふりあげ走ってくる。鋭い爪が見えた。ぼくに向

かってくる。長い爪が、ぼくに向かつて……。

「シン！ 光でクスクスを倒して！」

クスクスがくる。ふりあげた爪が、月明かりでキラリと光る。

ぼくはポケットから本をとり出した。逃げよう……。

「シン、光！ お願い！」

本を開いて、回した。世界がぐるりと回った。

本を回して、上の段の、縦書きの文章を読もう

さっきの純の言葉が、まだ耳に残ってる。

クスクスの弱点は本当に光なんだろうか。この腕時計
の光で、本当に倒せ……あれ？ 左腕に腕時計がない。

そんな、あれがないと！

あわてて体中をパンパンたたいて探すと、パーカーの
ポケットに腕時計が入ってた。

おかしい、暗闇の世界では腕にはめてたはずなのに。
それにぼくは今、上靴を履いてない。靴下のままだ。

「シン、光で倒して！ 腕時計で！」

純の言葉が頭の中に響く。今でもそうやって助けを求
めてるみたいに。

「これさえあれば、クスクスを倒せるんだよね？」

強く腕時計をにぎった。手の中でボタンが押され、ま
るで返事してるみたいに腕時計が光った。

怖かった。でも純を助けに行かないと。純の言葉を信
じれば、腕時計の光でクスクスは倒せるんだ。

もう一度あの、暗闇の世界に行こう。
窓から入る夕陽をあびて、顔がじんわり熱くなる。やる気がわいてきた。

そうだ！ 部屋のすみにある机に走り、筒型の懐中電灯を出した。クスクスの弱点が光なら、これも役に立つはずだ。それから台所のシンクの下を開け、ドアにかかっているいちばん大きな包丁を出した。

暗闇の世界にもどったら、目の前にクスクスがいるはずだ。だから、まず包丁で攻撃して、それから腕時計や懐中電灯の光で……。

ぶるぶると手が震えた。ぼくは、とんでもないことをしようとしているんだ。

部屋の真ん中に立って、壁にかかっている時計を見た。四時五十五分だ。

行きたくない気持ちはまだ残ってる。どんなにがんばっても、恐怖心は消えないような気がした。

4. 光の威力

ぐるりと回った瞬間、カイツバレイ包丁を突き出した。
でも、全然手ごたえがない。それどころか、ぼくの手の中はからっぽで、持ってたはずの包丁がない。
見まわすと、暗くてガラッとして、だれもいない部屋だ。ここはアパートだ。どうしてここにもどってきたんだ？
パーカーのポケットを探ると、懐中電灯もない。足には上靴を履いている。
う、腕時計は!? あわてて見ると、しっかり腕についていた。
「おかつたあ……」

包丁も懐中電灯もないなら、これが最後の武器だ。

そのとき、思い出した。そうだ、純や左千夫は？

「急がないと！」

部屋を飛び出した。階段を駆けおり、公園に向かって走る。暗闇の中をひたすら走る。

腕時計のボタンを押す時間もつたいない。1秒でも早くもどらないと。

西の入り口から入って、公園を走る。真っ暗だ。闇の中から不気味な物音が聞こえる。恐怖がぼくを捕まえようとしている。

東の入り口に近づいたとき、暗闇を走ってくる姿が見えた。純と左千夫だ。すぐ後ろからクスクスが追ってくる。

純の背中で、リュックサックが大きいはずんでる。あれじゃ入らないと出ない。

腕時計をはめた。懐中電灯をパーカーのポケットに入れ、包丁を右手に持った。
向こうの世界に出たら、すぐにクスクスを刺してやる。大丈夫、ぼくにだって倒せる……。
開いた本を両手で持って、覚悟するために大きく息を吸いこんだ。
本をひっくり返すと、世界が回った。



本を回して、下の段の、横書きの文章を読もう

クスクスが純のうしろに追いついて、長い腕をふりあげた。左千夫がボールを投げつけるけど、全然違う方へ飛んでいく。

「こちだ！」

ほくの声で、純はようやく気づいた。クスクスまで声に反応した

のか、ピタリと止まった。

そのときに、純と左千夫が走ってくる。

「シン、もどってきたんだね！」

「うん。ホントに腕時計の光で倒せるの？」

「大丈夫！」

トランスン！ 地震がした。クスクスが大きな体をゆらしな

から、こちに向かってくる。

「く、くる……」

腕時計を向けた。ボタンを押せば光が出るんだ。

でも、もしも光が効かなかつたら……。

恐怖がいきなり、ほくの手足をつかんだ。体が固まって、言うて

とを聞かない。

クスクスがほく目かけてやってくる。

あと3メートル、2メートル……。

怖くて動けない。どうしよう……どうしよう……。

クスクスが目の前で、長い腕をふりあげた。

「シン！ 光！！」

純の声が聞こえた。

腕時計のボタンを、押した。

まぶしい光が飛び出して、クスクスの体をつらぬいた。

一直線にのびた光が、クスクスの体を突きぬけて、暗い空をサ一

チライトのように照らして。

クヌクスは腕をふりあげたまま、固まって動かない。刺さった光

のまわりから、体がドロドロ溶けだしてゐる。

やっぱりクヌクスの弱点は光だったんだ。

腕時計の光が消えた。

もう一度ボタンを押して光を出したけど、あれ？ あつというま

に消えてしまった。

おかしいぞ。何度もボタンを押しているけど、そのうち光はつか

なくなってしまった。わかった、充電切れだ。

そのとき、むわっとした臭いが押しよせてきた。

「シン！」

前を見ると、クヌクスが溶けながら倒れてくる。

「わっ！ わっ！」

ほくは驚いて尻もちをついてあどすさる。

「左千夫も引っぱって！」

純の声がして、うしろからグイッと引っぱられた。

目の前に、クヌクスがグシヤリと倒れた。ドロドロ溶けて、液体

になつていく。ゾクゾクと泡を噴きながら蒸気になり、最後には跡

形もなくなつて消えてしまった。

ほくはゆっくり立ちあがって、クヌクスの消えたあとをぼんやり

ながめた。

「やったあ！ シンがクヌクスを倒した！」

純の声が暗闇に響く。そうか、ほくが倒したんだ……。

「やったんだ、ほくが……。やったんだね！」

「そう！ シンが倒したの！ やっぱリシンは救世主だったんだ

ね！」

純がほくの手をキュッとにぎった。

「あっ！」

「あっ！」

ほくと左千夫は同時に声を出した。なんだか情けない声だ。

純がようやく手を離してくれたので、「きゅ、救世主だなんてお

おげさだよ……」ほくは言った。

「だって救世主はクスクスを倒して世界を救うって、教科書に書いてあるんだから！」

「じゃあ、これで世界は救われたんだね」

「ちげーよバカ。おまえなんも知らないんだな。いいか——」

「クスクス……クスクス……」

左千夫の声が別の声にかき消された。

ふり返ると、公園の奥の闇の中、なにかがそわそわ動いている。

クスクスだ。何十匹もいる。じゃあ、あの1匹だけじゃなかった

んだ。

「クスクス……クスクス……」

声が近づいてくる。

「お、おまえが本当に救世主なら、全部倒してみろよ！」

左千夫は泣きそった。

「でも……ダメなんだ。もう充電がなくて、光らないんだ」

ほくは弱々しく左腕を見せた。暗すぎて、左千夫にはもう腕時計が見えないかもしれない。

「逃げるぞ！」

左千夫が純の腕を引っぱった。でも純はふりほどく。

「光を持つてるのは、シンだけなんだよ。シンだけがこの世界を救

えるんだよ」

「充電しないとダメなんだ。太陽の光が必要なんだ」

うっ！ 明るさに目をつぶった。暗闇の世界からもどるたびに目がびっくりする。ハッとしてうしろをふり返ると、茶色い部屋の壁があった。

ぼくは夕方の静かな部屋で、本と包丁を持って、一人で立っていた。聞こえてくるのは、ぼくの中でうるさく鳴りつづいている、心臓の音だけだ。

「ハアア……」

大きなため息をついたら、こわばっていた体から緊張感がスルスルぬけていった。

よかった、帰ってこられたんだ……。

壁の時計を見ると、四時五十五分だ。

あれ？ 暗闇の世界に行こうと思って本をひっくり返したときも、たしか同じ時間だったぞ。ってことは、向

「シッがきた世界には太陽があるんでしょ！ 充電してきて、お願

い！ この世界には光が必要なの！」

「くるぞ！」

左千夫が強引に引っぱると、今度は純も抵抗しなかった。2人は

公園を飛び出して十字路の方へ逃げていく。

残されたぼくのうしろから、

「クスクス……」「クスクス……」

ずどい数の声が追ってくる。

純と左千夫が十字路を左に曲がるとき、声が聞こえた。

「シッ、絶対もどってきて！」

うしろからクスカスの声がじわじわ迫ってくる。怖くてうしろを

ふり向けない。

うしろポケットから本を出して開いた。もう一度この世界にも

この世界にいるあいだは、こっちでは時間がたたないんだ。

なるほど、ナゾだらけの世界だけど、こうやってわかることもあるんだ。

ほかにもなにか発見できないかな。ぼくは本と包丁をテーブルに置き、パーカーのポケットを探ってみた。懐中電灯が入っていた。

そうだ、どうして暗闇の世界では、包丁も懐中電灯も消えてたんだろう。たしかに用意したはずなのに、本を回すとなくなっていた。でも腕時計だけは、用意したとおり腕についていたんだ。

うーん、なにか、ぼくの知らない法則があるような気がする。

考えこみながら下を見ると、ぼくは靴下を履いていた。でも暗闇の世界に行くと、なぜか上靴を履いてるんだ、学校にいるときみたいに。

とどいてくるのか、自分でもわからなかった。

本をひっくり返すと、世界が回った。



本を回して、上の段の、縦書きの文章を読もう

そもそも上靴を履いてるのは学校にいるときだ。
腕時計は図書室にいるときだけつけてる。

上靴と腕時計、両方あるのは図書室にいるときだけだ。
わかった！

暗闇の世界のぼくは、図書室の姿なんだ。今日の昼休み、最初に本をぐるりと回したときのままなんだ。だから、昼休みに持つてなかった包丁と懐中電灯は、消えたんだ。

ぼくは法則を発見してうれしくなった。飛びはねたい気持ちだ。

でも……あれ？ 暗闇の世界に初めて入ったときの姿なら、これから新しく持つていくことはできないってこと？ 武器とか、明かりがつくようなものはダメで、腕時計の光だけを頼りに、ぼくはクスクスの群れと戦わなといいけないの？

左手の腕時計をじっと見た。これが唯一の武器なんだ。

ぼくは、相棒に挨拶するみたいに、腕時計のボタンを押した。だけど光がつかない。そうだ、充電が切れるんだ。太陽の光で充電しないと。

でも、こつちの世界で充電しても、暗闇の世界で使えるんだらうか？ ものが運べないなら充電だってダメかもしれない。充電が切れたままなら、クスクスを倒すなんて絶対無理だ。

力もぬけて、ぼくはテーブルの横にゴロンと寝そべった。じっと天井を見て考える。

純はぼくのことを救世主って言ったけど、本当にそうなんだらうか。だって同じクラスの小林君すら助けられない。ぼくはいじめを見ないようにして、いつも逃げてる卑怯者なんだ。

寝転がったまま目を閉じた。壁時計のコチコチという音だけが聞こえる。台所の窓から差しこむ夕陽が、顔にあたって暖かかった。

待てよ……。ふと思った。暗闇の世界に行くたびに図書室の姿にもどるなら、腕時計の充電ももどるんじゃないか？

なかなかいい考えだ。これって調べられるかな？

今、充電はゼロだから、暗闇の世界に行つて、腕時計のボタンを押せば結果がわかる。もし光がつけば、充電は図書室の状態にもどつてゐることだ。

よし！ 突然やる気がわいてきた。ぼくは勢いよく起きあがつて、テーブルの上の本を手にとつた。暗闇の世界に行こう。

本を回したらどこに出るんだろう。もしも最後の場所にもどるなら、公園の、クスクスの群れの前に出ることになる。

思い出ただけで背筋が寒くなった。

「クスクス……クスクス……」

声が聞こえたような気がした。嫌な臭いが、鼻の奥に

よみがえる。

か、考えよう……。

昼休みにぼくは、図書室の「通路」で本を回したんだ。そしたら暗い図書室の「通路」にいた。そのあと、クスクスから逃げるために図書室の「広場」で本を回すと、こっちの世界の「通路」にもどつてた。

変だ。行きは同じ場所に出るのに、帰りは違つてゐる。

放課後、学校から帰ってきたぼくは、アパートの「部屋」で本を回したら、暗いアパートの「部屋」にいた。やっぱり、行きは同じ場所に出たんだ。

で、帰りは？ 純たちと一緒にクスクスから逃げて、「公園」の近くで本を回したら「部屋」にもどつてた。

そう、もどるんだ。「部屋」から暗闇の世界に入ったから、帰る場所も「部屋」なんだ。

つまり、行きは同じ場所に出て、帰りは入ってきた場所にもどるってことだ！

どんどん法則がわかっていくぞ。正解が次々に見つかっていく。

暗闇の世界に行くと、ぼくは昼休みの図書室の姿になる。上靴や腕時計も昼休みの状態にもどるんだけど、充電はまだわからない。

それと、本をひっくり返したら、暗闇の世界の同じ場所に行ける。で、暗闇の世界で本をひっくり返したら、入ってきた場所にもどる。

さっそく、本をひっくり返して実験しよう。

腕時計をはずし、部屋のすみにある机に置いた。もし図書室の姿にもどるなら、暗闇の世界に行けば、左手に ついてるはずだ。

アパートの部屋からは、さつき暗闇の世界に行った。

今度は別の場所で本を回してみよう。

靴を履き部屋の外に出た。通路の手すりに手をかける。住宅街が見わたせる。太陽はもう、地平線の向こう

5. 実験の結果

闇が、襲みたいにぼくを包んでる。

ここは、どこだろう。もし、アパートでもなく公園でもなく、まったく知らない場所だったら……。

見あげると、月はないけど、空には明るさが少しだけ残ってる。目をこらし、じっと前を見つめた。目がだんだん、暗闇に慣れてくる。まわりを覆っていた黒い霧が、少しずつ晴れていく。

ぼくの前に、通路の手すりが見えた。ここはアパートの2階だ。思ったとおりだ。本を回すと、暗闇の世界の同じ場所に出た。ま

ずは移動の実験成功だ。

に姿を消して、おまけみたいな明るさが、街を静かに覆ってる。

実験だ。ここで本を回したらどうなるか。

本をひっくり返すと、ぐるりと世界が回った。



本を回して、下の段の、横書きの文章を読もう

左腕を見た。暗い中でも、腕時計があるのがわかる。足を見ると、

靴を履いてるのはわかるけど、どちだろ？ 外靴？ 上靴？

手すりに手をかけ、足を持ちあげ顔を近づけた。上靴だ。

やった！ やつぱり図書室の姿なんだ。実験の結果がどんどんわ

かって、法則が証明されていく。

はずむ気持ちで腕時計のボタンを押した。

光がつかない。え!? もう一度押すけど、つかない。というごと

は、腕時計の充電は、図書室のときの充電量にもどらないんだ。

じゃあ、ぼくの世界にもどって充電したら、暗闇の世界ではどう

なるんだろ？ もし充電されなければ、腕時計はもう光らないと

いうことで、そうしたら……

「クスクス、クスクス……」

ぼくの不安をあざ笑うように、不気味な声かした。

はあはあと、荒く息を吐き出しながら、通路に立っていた。顔をあげると、まぶたを閉じるようにどんどん暗くなつていく街の姿があった。もどれたんだ……。

「いてっ！」

ホツとしたとたん、痛みが襲ってきた。通路に倒れたときの痛みだ。背中と横つ腹がじんじりする。それに、なぜか左腕も痛い。

見ると、パーカーの袖がパツクリ切れてる。手首からヒジまで、長い三本の切れ目が入ってる。

切れた袖をかき分けると、血は出てないけど、薄皮が剥がれていた。クスクスだ。あの爪にやられたんだ。

そのとき、コツ、コツ……。

音がした。もしかしてクスクス!? 下を見ると、女の

人が歩いてた。もうすぐ夜で、みんな家に帰っていく。

腕の痛みを引きずりながら、ぼくは部屋にもどった。

もうこのパーカーは着られない。灰色のパーカー、お気に入りに入ってたのに……。

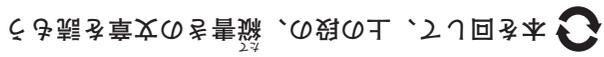
押し入れに入れて、かわりに緑色のパーカーに着替えた。机の上を見ると、腕時計がポツンとあった。

そうだ、実験のために置いたんだ。腕時計を手にとると、ゴムのベルトに切れ目が入ってて、もう少しで完全に切断されそう。ぼくが腕で防御したとき、クスクスの爪でやられた傷だ。

暗闇の世界でやられたら、こっちの世界でも傷が残るってことだ。今回は腕時計とパーカー、それに腕のかすり傷ですんだけど、クスクスの腕が、あと数センチのびていたら……。

腕時計を持つ手がブルブル震える。おさえようとしても止まらない。

下を見ると、暗闇の中にうつすら白い肌が見えた。クスクスだ。3匹が固まって、アパートの前を駆けていく。左千夫が言ってきたとおり、光が弱点のクスクスは、夜になると動きが活発になる。そのとき、クスクスの1匹が進路を変えて、こっちに向かつて走り出した。クスクスはアパートの下までくると、突然ジャンプした。異常な跳躍力だ。一瞬でぼくの目の前まで飛びあがり、空中で長い腕をレコッとした。「ひいっ！」腕で顔を守るけど、ゾォン！ と吹き飛ばされた。痛がってなんかいられない。逃げよう、とにかく逃げないと！ でも本がない！ どこかに落としちゃった！ あわてて探すけど、暗くしてどこにあるのかわからない。「どこ？ どこ？」這いずりまわって探す。



本を回して、上の段の、縦書きの文章を読もう

トスン！ 通路に衝撃があり、すぐ横で「クスクス！」声が出た。う……。臭い息が鼻を直撃して、気が遠くなる。そのとき、本にふれた。拾ってすぐ開く。ピユウ！ と腕をふりおろす音がした瞬間、ひっくり返すと世界が回った。

暗闇から逃げるように、ぼくは部屋の電気をつけた。蛍光灯からまぶしい光が降りそそぎ、部屋の中がいつきに明るくなった。

「ここは暗闇の世界じゃない。だからもう大丈夫。こつちの世界にいれば、ぼくはずっと安全なんだ。」

今までのようにふるまえば、現実の生活にずっと残っていられるような気がして、ぼくは晩ご飯の用意をはじめた。もうすぐお母さんが帰ってくる。その前にご飯を作ろう。

冷蔵庫からソーセージとモヤシを出して、フライパンで炒めた。箸ですばやくかき回し、ケチャップで味つけをした。完成だ。あとは炊飯器にご飯が入ってる。

疲れて帰ってくるお母さんに、手作りのご飯を食べてもらいたいかった。けどお母さんは帰ってこない。

空腹を知らせる目ざまし時計みたいに、ググーとお腹が鳴った。今日はいろんなことがあったから、すごくお

腹がすいてるんだ。

ぼくはご飯をよそってソーセージ炒めを一人で食べた。テレビを観ながら食べていると、にぎやかな料理番組がやっていて、ぼくはさびしさと一緒にご飯を飲みこんだ。

ご飯を食べて食器を洗い終わったとき、玄関のドアが開いた。

お母さんだ。美容院で働いてるお母さんは、朝、おしゃれた服でかっこよく働きに出るけど、帰ってくると疲れてくたびれてる。

「お帰りなさい！」

「ただいま」と言いながらお母さんはテーブルの上にビニール袋を置いた。コンビニ弁当とビールの缶が透けて見える。

それでもぼくは、ソーセージ炒めを電子レンジで温め、テーブルの上に置いた。お母さんは「ありがと」と言った。やった！ 体中にうれしさが広がった。

早く食べてほしいんだけど、お母さんは携帯電話をいじってる。ぼくは邪魔にならないように、部屋のすみに行った。

机の上に、腕時計が置いてある。そうだ、腕時計のベルトを直さないと。

接着剤で、ベルトの切れたところをくつつける。腕時計は去年、ぼくの誕生日にお父さんがくれたんだ。そのころお父さんと一緒に暮らしてて……。

胸がじんじん痛みます。ベルトの傷みたいのに、ぼくの心にも傷がある。

腕時計のベルトは直った。強い力で引っぱらなければ大丈夫だ。充電は、どうしよう。ここで充電しても、暗闇の世界で充電できるとはかぎらない。もしされてなかったら、凶暴なクスクスに勝てるわけがない。

救世主なもんか。そんなわけない。ぼくはふつうの小学生で、ケンカも強くない。たまたま本をひっくり返

して、暗闇の世界に行っただけなんだ。

明日、本を返そう。昼休みに図書室に行って、律子先生に謝ろう。そうすればきつと、許してくれるはずだ。

もう寝よう。押し入れから布団を二つ出して敷いた。

真ん中にあるカーテンの仕切りを閉めると、部屋は二つに分かれた。

布団に入っても、電気は消さない。カーテンで仕切っただけなので、電気を消せば、お母さんの方も消えてしまう。お母さんがまだ起きてるから、ぼくは電気をつけたまま寝るんだ。

だけど全然眠くならない。目をつぶっても、暗闇の世界のことを思い出してしまう。

「絶対もどってきて！」

純の声が頭の中で響いてる。でも純、無理だよ。あんな危険な世界には行けないよ。

でも、とりあえず充電だけはしておこう。暗闇の世

界に行くためじゃなく、休み時間のために。予鈴の前に、アラームが鳴るように。

布団から出て、腕時計を窓の下に置いた。これで寝られるような気がした。布団にもどつて「おやすみなさい」とつぶやくと、カーテンの向こうから「おやすみ」という声が返ってきて、ぼくはすぐに眠りに落ちた。

*

「しまった！」

朝、目覚めてすぐ窓の下を見ると、腕時計が部屋の方を向いていた。充電するためには、文字盤を窓に向けて光をあてないといけないのに。

不安な気持ちで、ボタンを押した。文字盤がピカッと光った。

「よかったあ」

思わず声が出た。でも、どのくらい充電できてるか

わからないぞ。

お母さんの布団はもうしまわれていて、真ん中のカーテンを開けると、部屋にはだれもいなかった。

緑色のパーカーを着て、外に出た。

明るい！朝日で街が黄色く見える。この世界は平和だ。だってクスクスにおびえずに道を歩ける。

純たちは今ごろ、どうしてるんだろう？暗い朝をむかえて、おびえながら登校してるんだろうか。

ダメダメ、考えないようにしよう。ぼくは歩くスピードを速め、学校へ急いだ。

「焼却場で燃やすぞー！」

教室の前までくると、声が聞こえた。やっぱり今日もやってる。

嫌な気持ちを押し殺してドアを開けると、男子が小林君の教科書を松明みたいにかかげ、走ってるのが見えた。

「とりかえさないと焼却場で燃やされるぞ！」

まわりもはやしたてる。教室のうしろでは、桐山エリ子がニヤニヤ笑ってる。

昼休み、ぼくは教室を飛び出した。本をうしろポケットに入れて、階段を駆けおろる。

今日、本を返そう。ぼくには関係ないんだ。ぼくが行きたいと思ったわけじゃない。突然、暗闇の世界に飛ばされて、ケガまでしたんだ。

それに腕時計の充電も、暗闇の世界に引き継げるとはかぎらない。今朝の充電が暗闇の世界で使えなかったら、ぼくにはなにもできないんだぞ。

暗闇の世界のことなんて関係ない。純や左千夫のいる世界と、ぼくの住む世界は違うんだ。こんなやつかいなものに、かかわってられないんだ。

階段の上から、小林君の泣き声が聞こえた。「焼却

場で燃やすぞ」っていじめられてる。あれも、ぼくには関係ないんだ。

図書室のドアを開けると、律子先生はカウンターに座り、なにか読んでいた。司書教諭っていう図書室専門の先生で、ほとんどしゃべらないから、みんなから変わった先生だと思われていた。

図書室に入って歩きます。早く本を返そう。勝手に持ち出したんだから怒られると思うけど、これを返せば、終わりなんだ。暗闇の世界から逃げることができる。純からも、左千夫からも、クスクスからも。

関係のない世界の、関係のない人たち……。そうだ、みんな、本の中の人物だと思えばいいんだ。ぼくが持つてるこの本の、登場人物だと思えばさっぱりする。

ぼくとは無関係だ。本の中の話なら、つづきを読まなければいいだけだ。本を返せばそれでおしまい。

でも、本の中の人たちって……つまり登場人物って、

本を閉じてるあいだ、どうしてるんだろう？

気がつくとはくはカウンターの前に立っていて、律子先生が目の前でじっと、ぼくを見つめていた。

「先生、読まなくなったなら、本の世界はどうなるんですか？」

な、なに言ってるんだ！ 思わず律子先生に聞いたかった！

先生はなにも言わず、ぼくをじっと見つめてる。

まずい、変な子だと思われてる。もっとなにかしゃべらないと。

「ほ、本の世界に住む人たちは、ずっと止まったままなんですか？」

先生は一瞬、目を伏せた。

「本の中では、みんな、生きてるの」

そう言っただけでぼくを見た。小さくかすれた声だけど、たしかな音色があるような、不思議な声だ。

「え、えーと……ごめんなさい！」

ぼくはカウンターの前を走った。広場をぬけ、本棚と本棚のあいだに隠れるように入った。

なんてはずかしいことを聞いたんだ。もう律子先生の前に出られないよ。本も結局、返せないじゃないか。バカバカ、ぼくのバカ。

ぼくはうす暗い通路で、自分の失敗をなじりつづけた。そうして昼休みが終わるころ、ようやく決心した。このまま本棚にもどそう。もともとちゃんと借りた本じゃないんだから、こっそり返せばいいんだ。

本棚に手をのばし、辞典を手にとった。箱だけで中は空っぽだ。

ぼくはうしろポケットから本を出した。

「本の中では、みんな、生きてるの」

さっきの律子先生の言葉がよみがえる。ぼくの心にグ

サツと刺さってる。みんな、生きてるんだろうか。純も、左千夫も。

ぼくは本を見つめた。

「シン！」

純の声が聞こえた。本の中からだ。それに、暗闇の世界の声や物音も、ざわざわとあふれ出し始める。

「クスクス……」と不気味な声も聞こえる。今でもみんな、怪物から逃げているんだ。

どうしてだろう。自分でもわからないけど、このまま本をもどして、純たちを忘れることはできないと思った。

パーカーのポケットから腕時計を出した。ぼくは救世主なんかじゃない。世界を救える自信なんてない。でも、ぼくには光を生み出す腕時計がある。

不完全だけど、充電はしたんだ。暗闇の世界でも充電できてるかわからないけど、きつと、大丈夫だよな。ピピピと腕時計が応えた。あと十秒で予鈴が鳴る。

6. トヨ子

暗闇の中でチャイムが鳴ってる。きくと予鈴だ。光なんかほとんどないのに、ぼくにはここが、図書室の通路だとわかった。ぼくが見つけた法則だと、入った場所と同じところに出るんだ。図書室の通路で本を回せば、暗闇の通路に出る。初めて暗闇の世界にきたときも、ここだった。そのときはなにも見えなくて、怖くっておびえてた。でも、今では少し、余裕がある。それに、ぼくには光の出る腕時計があるんだ。腕時計を見た。充電はどうなってるんだらう。もしも、ボタンを押して光が出なかつたら、ぼくの世界の充電は、暗闇の世界では使

アラームを止めて、本を開いた。怖い。自分に救えるかどうか、わからない。だけど……。チャイムが鳴りはじめた。教室にもどらないといけない。なのにぼくは本をひっくり返した。純たちのために。世界が回った。



本を回して、下の段の、横書きの文章を読もう

えないってことだ。腕時計に手をのばす。ボタンにふれた。この小さな出っばりを押しせば、結果がわかる。もし充電されてなかつたら、どうやってクラスと戦えばいいんだらう。予鈴が鳴り終わって、図書室は静寂に包まれた。暗闇の中、ぼくはボタンを押しした。トビッ！ 光が出た。柱のように天井までのびて、そのなかを、小さなホコリがキラキラ舞っている。やった！ 充電は暗闇の世界にも引き継がれるんだ！ これでクラスと戦えるぞ！ 腕をふるって、光が踊る。10秒たつて光が消えると、ぼくはもう一度ボタンを押しした。光は一直線に通路をぬけ、中央の広場を越え、図書カウンターのうし

ろの壁まで居いた。

すごい、あんなに遠くまで！

ぼくは通路を走って広場に出た。光でそこら中を照らす。

からんとして、だれもいない。カウntaxーに律子先生の姿もない。

そういえば昨日、暗闇の世界にきたときも、先生はいなかった。

どうしてだろう。

カウntaxーの横にはドアがあって、閉まっている。その先は廊下だ。

もしかしたら先生は、職員室にいるのかも。それか、この世界に

は、律子先生は存在しないのかも……。

腕時計の光が消えた。ボタンを押そうと手をのばすと、指が腕時

計のバンドにふれた。

あれ？ コムのバンドなのにザラザラしてる。光をつけて見ても

ると、白い氷のような塊がついている。

これは接着剤だ。クスタスにやられて切れかけたから、昨日ぼ

くが直したんだ。

思い出したみたいに、左腕がジツと痛んだ。見るとパーカーの袖

が切れていて、ヒラヒラゆれている。これもクスタスにやられたんだ。

法則を思い出す。暗闇の世界にくるたびに、ぼくは最初に来たと

きの姿になる。つまり昨日の昼休みのかっこうだ。その証拠に、今

ぼくは、昨日クスタスに切られた灰色のパーカーを着ている。

ぼくの腕にも、パーカーの袖にも、腕時計のバンドにも、切られ

た痕が残ってる。ってことは、かっこうは昨日にもどるけど、直っ

たりはしないってことだ。傷は残って、もともどもどらない。暗闇の

世界でやられたら、終わりになんだ……。

腕時計の光が消えた。闇のシャッターがおりて、図書室はあこ

うまに暗くなった。窓から弱い月明かりが差しこんでいるけど、

ほくにとって頼りになるのは腕時計だけだ。この光が唯一の希望だ。
 腕時計のボタんに手をのばして、止まった。そうだ、充電はどの
 くらいあるんだらう。このまま光をつけて大丈夫なの？
 今朝、腕時計は窓とは逆の方を向いていた。100パーセントの充
 電じゃないはずだ。ほくは充電の量を知ることができない。クスク
 スが現れたときに、昨日のように充電切れになったら……。
 光は廊下に出たらつけよう。節電することにして、ほくは暗闇を
 歩いた。カウンターの前を通りすぎようとしたとき、コツン、と音
 がした。
 なに!? あわてて音の方を見る。窓から聞こえるぞ。さらにコツ
 ン、コツン……音がコづく。
 もしかしてクスクス? それにしては小さな音だ。
 用心しながら広場まで引き返した。静かに窓に近づく。外は月の

光だけで、よく見えない。クスクスらしき姿はないけど、たしかに
 音はした。
 さっき節電しようと思ったばかりだけど、ほくはしかたなくボタ
 ンを押した。
 光が飛び出し窓をぬけ、外を明るく照らした。広い通路がある。
 その向こうには花壇がある。真っ暗の世界なのに、花がいくつも咲
 いている。
 だれもいないみたいだ。そう思った瞬間、又ツと顔が現れた。
 外にだれかいる! 腕時計の光を顔にあびて、まぶしそくに顔を
 クシヤクシヤさせてる。
 お、女の子だ。純よりも小さい子で、4〜5歳くらい? まるこ
 とした体で、ピョンピョン飛びはねてる。
 腕時計の光が消えて、暗くなった。ほくはすくすくに窓を開けた。

「なにしているの？ そんなとこにいたらあぶないよ」

突然女の子が駆けてきて、バサッと飛びあがったかと思つた図書室に飛びこんできた。

「うわ！」

女の子はほくの目の前にアトント着地して、

「ありがと、開けてくれて」うれしそうにピョピョントはねてい

る。な、なんなのこの子？

腕時計の光をつけて、女の子を照らした。

全身黄色だ。モコモコした黄色いセーターを着て、細身の黄色い

アポンをはいている。ぷくぷくした丸顔に丸い体。大ききの違う風

船を2つ重ねたみたいだけど、手足は細くて、アトントして。女

の子が飛びはねるたびに、丸顔を覆う黄色い髪がサラサラゆれた。

「光るんだねそれ！」女の子が目輝かせて腕時計を指さした。

「う、うん」

「すごいねー！」手をのばして、チヨント腕時計にふれたけど、すぐ<に手を引っこめてモジモジしてる。腕時計に興味があるみたいだ。

「きみ、名前はなんというの？」

「レヨ子！ レヨはカタカナで、子は漢字！」

「そうなんだ……。えっと、この学校の子？ 何年生？」

「レヨレヨ！」レヨ子が笛のように笑った。「レヨ子は外のおうち

にいるんだよ」

外のおうち？ 変なことを言う子だ。ほとんどの学校でもノートリを

飼って校舎の外に小屋がある。でもレヨコなんかいないし、それ

にこの子は名前がレヨ子ってだけだ。

「クヌクヌ！ クヌクヌ！」と言ってレヨ子がいきなり走りだした。

「ど、どうしたの？」

トヨ子は図書室のドア目がけてはねていく。

なんなんだ？ 暗闇の世界はわからないとだけだけど、トヨ

子はその中でも、いちばんのナゾだ。

とにかく今は放っておこう、と思ったとき、窓の外から嫌な臭い

が漂ってきた。鼻の粘膜にこびりつくような、獣の臭いだ。

ふり向くと、窓の外に大きな体が見えた。月明かりに白い肌が

光ってる。体を大きくゆらしながら、こちに歩いてくる。

ほくは窓に走った。クヌクスは動きが遅く、まだ時間がある。

すぐに窓を閉め、カギをかけた。

腕時計のボタんに手をそえたけど、節電って言葉が頭に浮かんだ。

ここで光を使っているの？ もし充電がなくて、これが最後の光

だったら？

ほくは撃つかまえをして、じっと息をつめた。もし窓を破って

入ってくるなら、そのときは、光で撃つ。

クヌクスは、のっそり窓の近くまでよってきたけど、それ以上は

なにもせず、しばらくすると離れていった。もう1匹、別のクヌク

スも現れたけど、やっぱりこちに近づくと気配はないようで、迷子

の犬みたいいに外をウロウロしてる。

ボタンから手を離して、ほくはほおっと息を吐いた。どうやらク

ヌクスは、閉まっていれば、ドアや窓から強引に入ってくることは

ないみたいだ。

「もう大丈夫だよ」

カウンターのの方に声をかけた。

「トヨ子？」

返事はない。カウンターのままで歩いていくと、横にあるドアが開い

ていて、暗い廊下が見えた。

ほくもドアをぬけ、廊下に出た。

静まりかえってる。まるで深い海に沈んだ学校みたいだ。ほくは、

重い潜水服を着た潜水士みたいに、ゆっくり、廊下を歩いた。

そのとき、廊下の奥からガラガラと音がした。

あれは玄関のガラス扉が開く音だ。でも、今ごろだれか？

「ピヨピヨ！」

廊下の奥からなにか飛び出した。ヒヨ子だ。廊下を横ぎって階段

をあがっていく。

悪い予感がした。さっきのガラガラという音、まさか……。

廊下を急いだ。端までくると、右にある玄関に入った。

ピルのようにならんだ下駄箱が、外からのわずかな光に照らされ

てる。

そこに、律子先生がいた。いつも図書室にいるはずの先生が、驚

いた顔でこっちを見る。

あっ！先生のうしろ、玄関のガラス扉が開いている。そこからク

ラスカが入ろうとしてる。

ラスカが長い腕を押し入れて、半分だけ開いている扉を引き裂く

ように開けた。ギギギイ、と扉が悲鳴のような音をたてる。

ラスカが中に入ってくる。先生のうしろに迫ってる。

「先生！」

律子先生は凍りついたように動かさない。ほくは腕時計を前に出し

た。今こそ使おうべきだ。先生を助けるために！

「どうだ！」

ボタンを押すと、光はラスカの横を通りすぎた。

はずれた！

ラスカがそのそと進みだした。動きは鈍いけど、ほくだけを

目ざして突進してくる。律子先生の横を通り、ほくの前まできて、グワツと腕をふりあげた。

「うわあ！」とっさに腕をふった。光が左から右へ、切るように移

動すると、次の瞬間、クスクスは真つ二つになった。

「すてい……」

律子先生の声が聞こえた。

上下に切れたクスクスが、地響きをたてて倒れる。でも先生のう

しろに、もう1匹、クスクスが見えた。まだ玄関の外だ。

「先生！」

ほくは駆け出して、玄関のガラス扉にはりついた。すぐに左側を

閉める。

律子先生も走ってきて、右の扉を閉める。外からやってくるクスクス

クスの目の前で、ほくと先生は扉を閉めた。

ドシン！ という衝撃があって、重い扉がガツガツ閉まった。扉

の下のカギをかける時、ほくは長いため息をついた。

「まにあったね！」

声の方を見ると、目の前に律子先生の笑顔があった。あれ、変だ。

先生がいつもより若く見える。それにすてい明るい雰囲気だし。

「あの、えっと……」

モゴモゴ言っていると、倒したクスクスが蒸発して、それにあわせ

るように、腕時計の光も消えた。

「ねえ！ それ、光るってことは、きみがウツサの救世主なの？」

「はあ……」

「すてい！ 助けてくれてありがとう！」

「どうも……」

なんだから、とまどってしまふ。そのとき、チャイムが鳴りはじめ

た。午後の授業がはじまる時間だ。

「ねえ、教室に行きましょ！ みんないるから！」

「え？」

「ほら早く！」

先生はほくの手をとり、玄関から強引に連れ出した。

いつもの律子先生と全然違う。ほくはどうしていいかわからずに、

引っぱられるまま階段をあがった。

2階に出るとようやく手を離してくれたので、ほくは先生のあと

について廊下を歩く。

通りすぎていく教室はどれも暗い。だれもいないのかな？

ドアに近づいて中をのぞくと、スリリとならんだ机の下で、動い

ている影が見えた。

「クアクアが来たら、みんなああやって隠れるの。さ、行きま

しょ」

そう言って律子先生は歩いていく。ほくもあとを追いかけると、

「はい到着！」先生が止まった。

「先生、この教室って……」

「6年3組よ。わたしの担任のクラス」

「担任、なんですか？」

「そう、わたしの名前は——」

「律子先生。浅間律子先生ですかね？」

「すごい！ どうして知ってるの？」

「え、えっと、なんとなく……」

「なんとなく、ね。さっすか救世主！」

そう言って先生はドアを開けた。

7. 暗闇の6年3組

教室はガランとしていた。窓から月明かりが入ってくるけど、真夜中みたいに暗い。机とイスだけがならんでいて、人はだれもいなかった。さっきの教室みたいなのに、机の下に隠れているわけでもなさそうだった。教室を間違えたのかな？

「だけど律子先生は又々教室に入っていく。ほくも先生のあとについていくけど、6年3組のみんなはどこへ行ったんだろ？」

「出てきなさい。クラスは救世主くんがやってくれたよ！」

先生の言葉に、教室のうしろにある掃除用工具箱がガタガタゆれて、

「救世主！」

飛び出してきたのは、おかつば頭の女の子……純だ！

純がタタタ、とぼくの前まで駆けてきて、

「やっぱりもどってきてくれたんだね！」

「うん、純も無事に逃げられたんだね」

「あったり前でしょ！」

「ハハハ！ とぼくたちは笑った。まさか純が6年3組の生徒だったなんて。」

キギギ！ 嫌な音が教室に響いた。だれだ、せつかくぼくたちが喜んでるのに。音の方を見ると、だれもいないと思っただ机の下に、1人隠れる。

「おいシン、なにしにきたんだよ！」出てきたのは左千夫だ。

「なにって……」

「先生、こんなやつほっといて、授業やろうぜ！」そう言って教室の真ん中の席に座った。……左千夫も3組なんだな。

「じゃあ、授業はじめようか」

律子先生が言ったので、純もしかたなく席にもどる。左千夫の席から右に2つずれた、窓ぎわの席だ。

ほくは突然、宙ぶらりんになった。

「先生、あの、ほくは……」

「救世主くんも授業うける？」

「せんせい」純が手をあげた。「彼は佐田真一郎って名前だけど、みんな、シソって呼ぶんだって！」

「へー、じゃあシソ、好きな席に座って。授業はじめよう！」

「はい！」ほくはクラスに入ってもらった気がして、うれしくなった。転校生ってこういう気持ちなのかもしれない。

でもどこに座ればいいんだらう。教室を見わたすと、純と左千夫の席以外、全部空いている。あらためて見ると奇妙な光景だ。

「先生、あの……みんな休みなんですか？」

律子先生の顔が、電源を消したテレビみたいに暗くなった。ほく、なにかまずいことを聞いたみたいだ。

「あのね、みんなクラスに……」純の声は、小さくかすれる。「クラスが、6年3組の子を、1人ずつ連れていくの……」

あたりを見まわした。暗い教室に、だれもいない机が30台以上ならんでる。

「だからこのクラスには2人しかいないの？」

「うん……」

「クラスにさらわれて、それからどうなるの？」

「クラスのア、生け簾になるの……」

「ガスガス？」

「次の生け贄は純なんだ！ 純が狙われてるんだよ！」

先生が左千夫を止めた。

「そうとはかきらないでしょ。2人いるんだから」

「こないだシンが現れたとき、オレと純は逃げたんだ。そんなとき、

オレじゃなく、純の方を追ってきたんだよ！」

「だから、ガスガスの生け贄は、わたし……」

純が下を向いて、教室は悲しい空気になった。でも、ガスガス

でガスガスとは違うんだろうか？ ガスガスといえば、ほくにとっ

ては小林君をいじめる桐山コウジのあだ名だ。

「先生、ガスガスってなんですか？」

「え？ シンは知らないの？」

「はい……」

「シンは別の世界からきてるから、こっちの世界のこと、知らない

んだよね……」純がつぶやいた。

「じゃあどうしましょう！」突然、先生が明るく言った。「今日は

シンに、この世界のことを教える授業にしましょう！」

「えー、でも！」

「さんせい！」

先生のおかけで教室がいつきに明るくなった。

「じゃあ授業をはじめから、ほらシン、早く好きな席に座って」

せかされて、純と左千夫のあいだの席に座ろうとすると、先生が

止めた。

「あ、そこはダメなの。休んでるだけで、いるの」

「じゃあ6年3組には、もう1人いるんですか？」

「そう、家にこもってしまっ、出てこなくて。もうずっと、学校

にきてないの」

「広田椎奈……」純がホソツと言った。

「それ、休んでる子の名前？」

「うん。椎奈は、この世界で唯一の探険家だったの」

「探険家？ ってなに？」

「おまえ、ホソツなんも知らねーんだな、へ！」

「左千夫はだまって！ 今はソソに教える授業なんだから！ 先生、

わたしがソソに、世界のことを教えていいですか！」

「OK！ がんばって！」

純が元氣よく立ちあがった。

「探険家は、この世界ではいちばん大事な仕事なの。世界の果ての、

さらに向こうを旅してきて、世界をもっと大きくする役目なの」

そう言って純がチラツと先生の方をうかがった。先生はウンとう

なずいた。あつてららしい。でもほくにはわからななくてだらけた。103

「ねえ純、世界の果ての向こうが見つかったら、たしかに世界は大

きくなるんだらうけど、でもね、世界の果てってあるの？」

「ケツ！」左千夫のバカにした声が聞こえた。

「ソソ、こっちにきて外を見て」純が窓にピツタリはりついた。ほ

くも窓のそばに行く。

北北西小学校は、なだらかなのほり坂の途中にある。だから校舎

の2階からでも、街が見わたせる。外を見ると、街は暗い。月明か

りに照らされて、家の屋根や輪郭がうっすらわかるくらいだ。

「暗い、街だよ？」

「もこと！ その先！」

純にうながされて視線をあげた。家が、河原の小石みだいに、す

きまなくならんでる。さらにその向こうは……。

純が言葉につまって、助けを求めよう^{もと}に律子先生を見た。先生

は自分で答えずに、うながすように左千夫を見る。

「太陽のせいだ」左千夫は不機嫌^{まげん}そうに言った。「太陽が出なく

なつてクスクスか凶暴^{きようぼう}になったから、怖^{こわ}くて家から出られないん

だ。いじなしなんだ」

「左千夫が勝手にそう思ってるだけでしょ！ ほかに理由があるか

もしれないでしょ！」純が反論^{はんろん}したけど、

「じゃあ、ほかの理由ってなんだよ」

「それは……」

「ホラ見ろ！」

「うるさい！」純が机^{つくえ}の上の消しゴムを投げた。消しゴムは左千夫

の頭にあたってポコッといい音^ねがした。

「いてっ！ このおっ！」左千夫は消しゴムを投げ返すけど、全然^{ぜんぜん}

「あっ！」思わず声が出た。なにもない。突然^{とつぜん}、途切^{とぎ}れてなくなっ

てる。陸地^{りくち}と海^{うみ}の境目^{さかいめ}みだいに、ゆるやかなギザギザになって、街

は終わつてた。その向こうは、ない。

どういふこと？ 暗^くくて見えないんじゃない、街^{まち}の向こう側^{がわ}が

ぼつかりと消えてる。真っ白でもないし、透明^{とうめい}でもない。真空中、

なにもないような。つまり、あそこから先^{せん}は存在^{そんざい}してないってこ

と？

「あれが、世界の果^はて。その先を、探険家^{たんけんか}の広田椎奈^{ひろたすいな}が旅すると、

世界^{せかい}が広が^{ひろ}が^がつていくの」

「な、なるほど……」

「でも椎奈は、家にこもつて出な^でな^なくな^くな^なつた。だからこの世界

はずっと広がらないし、ずっとこのまま」

「どうして出てこないの？ 探険家^{たんけんか}なんだよね？」

「さてとは、クスクスは城まで行けるんだね！」

ほとくの言葉に左千夫がつまって、律子先生を見た。

「そうみたいね。でもどうやって行ってるのかわからないし、もし行ける手段があっても、クスクス以外の人間が、同じように行けるとはかぎらないでしょ」

「じゃあどうやってクスクスを倒すんですか！」

先生と左千夫と純が、驚いた顔でぼくを見た。

「シン、おまえ、クスクスを倒せると思ってるのか？」

「え、あ……そうかも」思わず言ってしまった。純と左千夫が同時

にしやべり出す。

「すごい！」

「そんなの無理だ！」

「どうして無理なのよ！」

のクスクスに生け鬘を連れてこさせてるんだ。おい、あれ見ろよ」

今度は左千夫が窓ぎわに行く。ぼくも外を見ると、左千夫が世界

の果てのさらに先を指さした。

世界の果ての先には、なにもない……はずなのに、おかしいぞ、

なにかある。さっき外を見たときは、世界の果てばかり見えて気がつ

かなかったけど、世界の果てのさらに先、なにもないはずの空間に、

煙突と建物だけがポツンと見える。

「あれがクスクスの城だ」

あの煙突に見おぼえがある。ほとくの世界では、あれは焼却場の煙

突だ。お父さんがそこで働いているからよく知っている。でも、変だ。

「ねえ、クスクスの城は、世界の果ての、さらに向こうにあるよ」

「だからだれも近よれねーんだ。クスクスは城からきて、生け鬘を

捕まえたらもどっていくんだ」

「だってガスグスの城には行けないんだぞ！ 行けてもどうやって倒すんだよ！」

「シムには光があるじゃない！ クラスとガスグスの弱点は光な

んだから！ ねえ先生！」

「そう、ね……」先生はこまごま顔をして

「先生、今でガスグスと戦った人はいるんですか？」

「ケッ！」左千夫が笑った。「バカ言うなよ。城までたどりつけ

ねーんだぜ」

「じゃあ、この世界でガスグスを見た人は？」

「いねーよ」

「じゃあどうして、ガスグスの城のこととか、光に弱いとかわかる

の？ それに、生け真になつてるとか」

「シム、教科書に書いてあるでしょ？」純が机の中から紙の束を出

した。「律子先生がまとめてくれたの、この世界について」

あのホッチキスで留められたプリントの束が、この世界の教科書

なんだろうか？

「シムの世界には太陽があるから、それは必要ないのよね」

先生が言うと、純は悲しそうな顔をした。

「じゃあ、生け真なんていないんだ……」

そう言って、純の目から涙が1つぶ落ちた。

「ほくがガスグスを倒すよ！」

「オレが守ってやるぜ！」

ほくと左千夫が同時に言うと、チャイムが鳴った。

「はい、そこまで」

先生が笑って言った。

お試し読み版はここまでです。
続きは本書にてお楽しみください。

島崎 町 (しまざきまち)

1977年、札幌生まれ。島崎友樹の名でシナリオライターとして活動。「札幌デジタル映画祭1999」最優秀賞、「2002函館港イルミネーション映画祭シナリオ大賞短編部門」グランプリ。脚本を書いた短編映画『討ち入りだヨ！全員集合』（2005年）は国内外で多数受賞。連続ドラマ『桃山おにぎり店』（2008年）は「国際ドラマフェスティバル in Tokyo 2009 ローカルドラマ賞」を受賞。

2012年、短編『学校の12の怖い話』（長崎出版）で作家デビューし、本書は長編第1作目となる。

ぐるりと

2017年6月1日 初版第1刷発行

島崎 町

発 行 者 関 昌弘

発 行 所 株式会社ロクリン社

〒152-0004 東京都目黒区鷹番3-4-11-403

TEL 03-6303-4153 FAX 03-6303-4154

<http://rokurin.jp>

装 幀 Good Grief

組 版 Katzen House

編 集 中西洋太郎

編集協力 高橋千春

印刷・製本 株式会社シナノパブリッシングプレス

本書の無断複写（コピー）は著作権法上の例外を除き、禁じられています。
乱丁・落丁はお取り替え致します。

© Machi Shimazaki, 2017 Printed in Japan